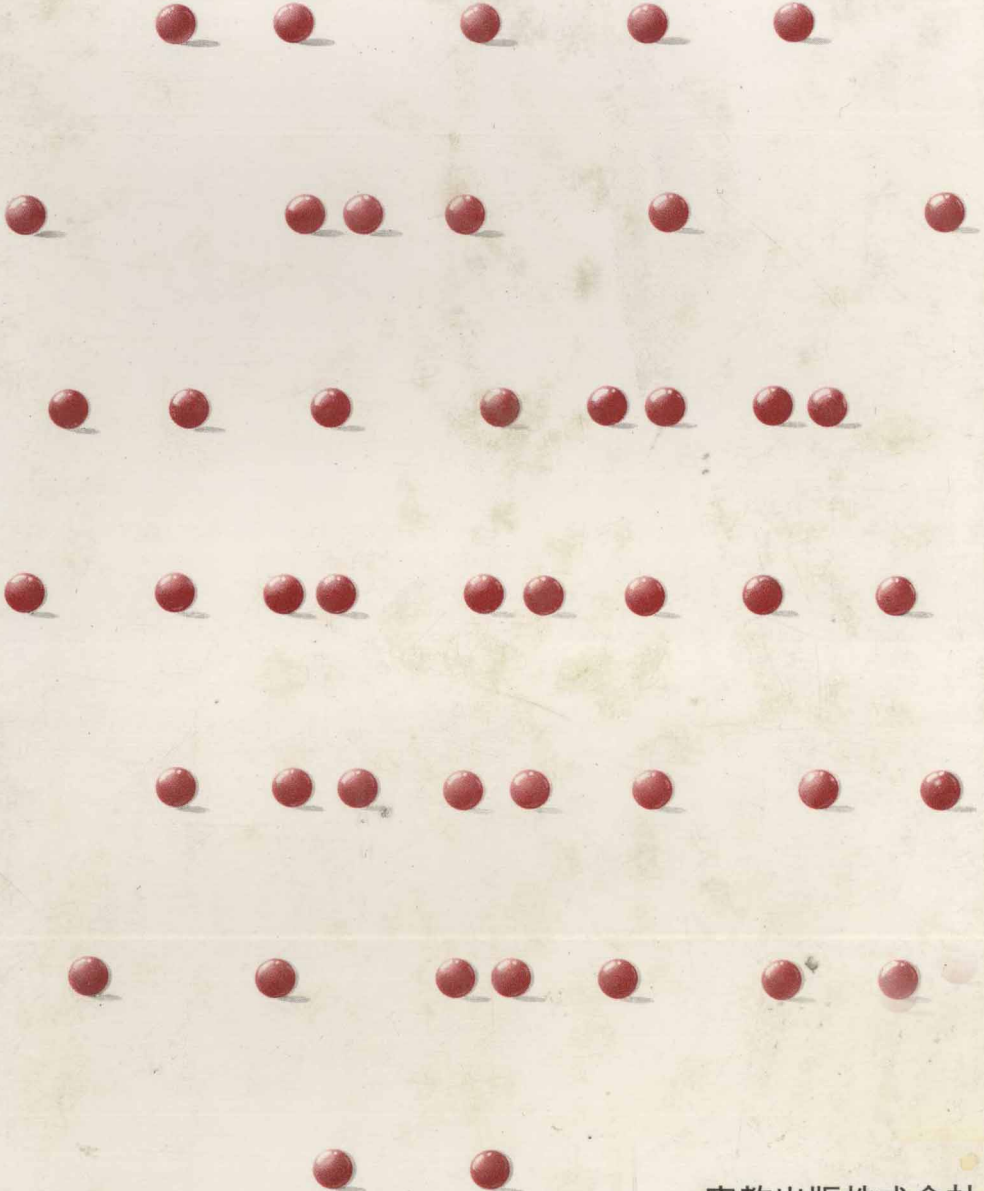


# 經濟史入門

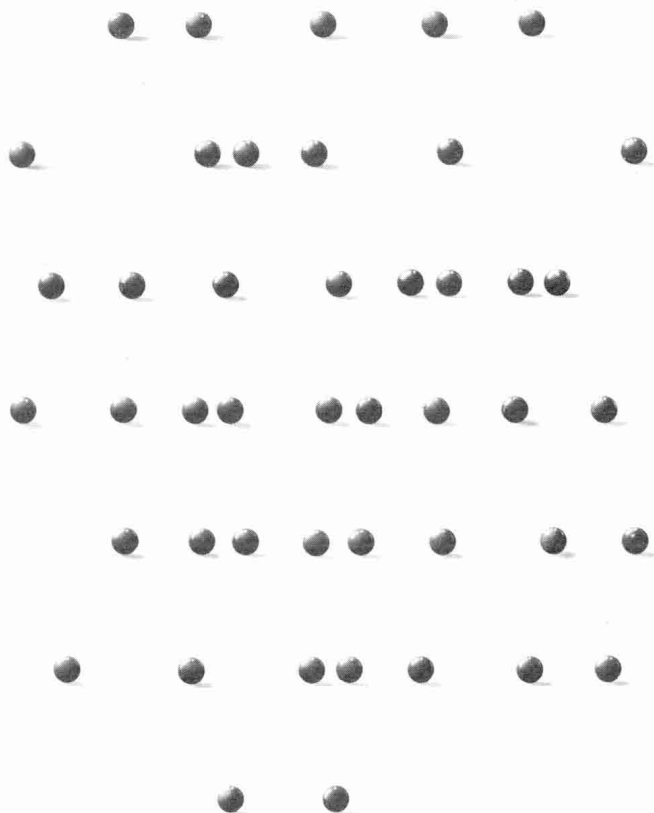
同志社大学教授 經濟学博士 小林良彰 著



実教出版株式会社

# 經濟史入門

同志社大学教授 經濟学博士 小林良彰 著



実教出版株式会社

著者略歴

こばやし よし あき  
小林 良 彰

昭和31年 東京大学文学部西洋史科卒業  
昭和43年 大阪大学大学院経済学研究科修士課程修了  
昭和52年 経済学博士（「フランス革命の経済構造」）  
昭和53年 同志社大学教授、現在にいたる。

主要著書

「フランス革命経済史研究」（ミネルヴァ書房）「市民革命」（三一書房）  
「フランス革命の経済構造」（千倉書房）「西洋経済史の論争と成果」（三  
一書房）「フランス革命史入門」（三一書房）

経済史入門

NDC 332

1979年3月31日 第1刷発行

著 者 小 林 良 彰  
発行者 宇 野 豊 蔵  
印 刷 有限会社昭文堂印刷所  
製 本 株式会社若林製本工場

発行所 実教出版株式会社  
東京都千代田区五番町五番地 〒102  
電話東京(263)0111(大代表)振替東京4-183260

© Y. KOBAYASHI 1979

定価はカバーに表示してあります。

3033-2336-3205

## はじめに

はじめて経済史を学ぼうとする人が、手にとってみて、わかりやすく親切な本だと感じるように、そういうところに焦点をあてながら私はこの本を書いた。とにかくこの本を読んでおけば、どのような試験を受けても何とかいけるようなものにした。文章はきわめて平易に、内容は標準的なものにした。

最近の学生には、日本史で受験して世界史は中学生程度という人が多い。それでも、いきなり経済史を学ばなければならぬ。そういう人のためにも、ここでは世界史の基本的内容をできるだけからませて説明をつづけた。

ただし、まったく標準的な説明で通すことは、学問の書物であるかぎり不可能である。経済史には論争が多い。今日標準的と思われる学説も、明日は誤りだとされて問題にされなるときがある。今日の標準的な学説をうのみにして紹介し、数年後にそれが誤りだとされると、学者としては不名誉なことになる。そこで、現在の標準的学説はこうだが、自分はこう思うというところまでくる。この部分は活字を小さくして補足説明のようにしたから、さしあたり読者は、この部分をとばして通読し、興味がでてくれば、後日読み返せばよいようにしてある。

最近、経済史の学界では方法論が盛んに論議され、数量経済史とか現代経済史とか、その他さまざまな経済史が世に問われている。しかし、そうした新しい経済史を理解するためにも、まず標準的なことを知らねばならない。数量をとりあげるとしても、問題の所在を知り、何のために数量を使うのが明らかにならなければならない。そうした普遍的な問題点の所在を網羅すること、そこにもこの本の課題があった。

いうまでもなく、経済史は、歴史一般を学ぶ人にとっても基本的な教養として必要である。経済史のない政治家、文化史家の意見は、観念的で宙に浮いたものになりやすい。

現代の社会、経済の専門分野をめざす人も、現代が過去の積み重ねの上に成り立っている以上、過去との対比に引き戻されることが多い。広い意味での歴史意識は、現代の社会経済を考えるうえで不可欠の要素になる。本書に盛り込まれた程度の知識と理解は、経済史を専攻する学生だけではなく、広く文科系の学生ならば誰でもが身につけておいてもらいたいものだ。

なお、この本に紹介した経済史における論争点について、もう少しくわしい内容を知りたいと思われる読者は、拙著『西洋経済史の論争と成果』を参照していただきたい。

昭和五三年一月七日

小林良彰

目次

\*印は補説および論争点

第一章 古代国家と商工業

1. 石器時代

- 人類の起源 1 旧石器時代 2 狩猟採集経済 3 新石器時代と農耕、牧畜 4 原始共同体 5 交換のはじまり 6 \*トールテミズム、アニミズム、シャーマニズム 7 \*母系制社会 8

2. 金属器時代

- 青銅器時代 9 四大文明の条件 10 階級社会 11 大河文明の地理的条件 12 \*多神教 12 鉄器時代 13

3. 古代の社会と経済

- アジア的生産様式 15 \*アジア的生産様式をめぐる論争 16 オリエントの商工業 17 ギリシャの商工業 19
- ローマの商工業 21 ラティフンディウム 22 古典古代 22 \*奴隷制の再評価 24 マルク共同体 26
- \*マルク共同体をめぐる論争 28 コロナート制 30 \*古代アジア社会の変質 31 古代の世界貿易 33

第二章 封建社会の成立

1. 封建制度の定義

- \*一般的な規定 35 従士制と恩貸制 36 封土を媒介とした臣従関係 37 カール・マルテルの改革 37 封建制と分権制 38 \*法制史的解釈の難点 40 領主対農奴の関係 41 農奴制と封建制 43 \*二つの定義の結合 44

2. 莊園……………45

莊園制のはじまり 45 莊園のモデル 47 古典莊園と非莊園領地 48 \*莊園理論の問題点 49

3. 領主権と農村共同体……………50

賦役と農奴 50 \*農奴制の定義 51 貢租 52 人頭税 52 死亡税 53 結婚税 53 強制使用権 54 經濟外強制 54 十分の一税 55

4. ヨーロッパの農業と共同体……………56

三圃制度 56 家畜の使用 57 三圃制以外の農法 58 耕地混在 60 開放耕地制と耕地強制 60 \*共有地と共同体 60

### 第三章 封建社会の展開

1. 封建地代の変化……………62

賦役の消滅 62 \*封建社会において奴隷が残るといふ説 64 ヨーマンの成立 65 \*自由借地農・贍本小作農の存在 66 東欧における農奴制の強化 67

2. 手工業の発達……………68

奴隷制手工業の滅亡 68 家内工業 68 農村手工業 69 専門的手工業 70 ギルド 70 親方と徒弟 71 職人 72 \*ギルドの進歩性と保守性 72

3. 商業と都市……………73

ローマ帝国の崩壊と商業の衰退 73 メロヴィング朝の都市と商業 74 アラビア人の地中海封鎖 75 \*ビレンヌの商業断絶論 76 ノルマン人の商業活動 76 十字軍 77 商人ギルド 79 \*商人ギルドと手工業ギルドのどちらが先か 80

4. 中世の都市…………… 80

都市の規模の比較 80 自治都市 81 ツンフト闘争 83 ヴエネチア 84 フィレンツェ(フロレンス) 85

フィレンツェとメジチ家 86 \*フィレンツェとミケランジェロ 87 \*自治都市の限界 88

5. 農民一揆、宗教改革、荘園の崩壊…………… 90

変化した農民一揆の性格 90 ジャックリーの乱 92 \*ジャンヌ・ダルクの役割 93 ワット・タイラーの乱 94

ルターの宗教改革 95 ドイツ農民戦争 98 ルター派の限界 99 ツヴィングリとカルヴァン 100 宗教改革と

資本主義 102 \*ロシアの農民反乱 104 \*日本、中国の農民反乱 105

#### 第四章 絶対主義の時期……………

1. 絶対主義の成立…………… 107

王権の強化 107 常備軍 109 官僚制 111 大貴族の屈伏 112 ブルジョアジーの役割 114 ポルトガルとスペイン

の絶対主義 115 イギリス絶対主義 117 ジェントリの役割 118 \*ジェントリ論争 119 フランス絶対主義 122

プロイセン絶対主義 123 ロシア絶対主義 124 \*荘園制崩壊と絶対主義成立の関係 125 \*封建制度と絶対主義

の関係 127 \*絶対主義均衡説 128 王権の支柱 129 \*絶対主義の理論の日本史への適用 131

2. 商工業の新しい段階…………… 133

マニユファクチュア 133 特権工業 135 \*マニユファクチュア論争 135 問屋制手工業 137 商業資本 138

特権商人組合 139 フッガー家 140 \*商業資本と産業資本 141 商人貴族 141

3. 世界貿易の変化と影響…………… 143

中世の地中海貿易 143 インド航路の発見 144 商業革命 144 新大陸の征服 145 価格革命 145 ポルトガル、

スペインからオランダ、イギリスへ 146 \*価格革命にまつわる理論 147



4. 重商主義……………148

重商主義の規定 148 重金主義 149 貿易差額説 149 総貿易差額説と個別貿易差額説 150 コルベルティズム 150

重商主義の理論 151

第五章 市民革命の時期……………153

1. オランダ独立戦争……………153

オランダ独立戦争の原因 153 最初の市民革命 155

2. イギリス革命……………156

イギリス革命の原因 156 王党派と議会派の内戦 157 議会派の改革 158 クロムウェルの軍事政権 160 立憲君主制の安定 161

主制の安定 161

3. アメリカ独立革命……………162

王党派と愛国派 162 植民地の重商主義的統制 164 革命としての独立戦争 165 連邦政府の組織 166

4. フランス革命……………167

貴族 167 ブルジョアジー 167 フランス革命の原因 168 国民議会の改革 169 封建貢租の廃止 171 恐怖政治の政策 172 ナポレオンの政策 174 七月革命 175

5. 市民革命の経済理論……………176

土地革命の理論 176 商業資本と産業資本の対抗関係 179 政治的法的変革 180 市民革命の経済史的意義 182

\* ボナパルティズムの理論 184 \* 日本における市民革命 185 \* フランス革命と明治維新における共通点 186

\* 中国史への適用 187

第六章 産業革命の時期

1. イギリスの産業革命

産業革命の意味 189 水力紡績 190 蒸気機関 190 軽工業中心の産業革命 191 交通革命 191 最初の産業革命  
がイギリスで始まった理由 192 \*その理由の問題点 193

2. フランス、アメリカ、ドイツ、ロシアの産業革命

フランスの産業革命 195 ドイツの産業革命 197 アメリカの産業革命 199 ロシアの産業革命 200

3. 産業革命の理論

産業革命の結果 202 \*産業革命の始った時期 203 \*近代的産業資本家の系譜 204 自由貿易論 205 保護貿易  
論 206

4. 南北戦争とドイツ統一戦争

南部のプランテーション 208 産業資本の保護貿易論 208 奴隷解放宣言の効果 209 ドイツ三月革命 210 三級  
選挙法 211 ビスマルクの支持者 212 ドイツ帝国の性格 214

5. 農業の変革

第一次開込み 215 第二次開込み 216 資本主義的農業経営 217 農奴解放令 218 ユンカー経営 219 ホームス  
テッド法 220

6. 労働運動と労働問題

救貧法 221 工場法 221 ラダイト運動と無政府主義 223 労働組合運動 224 チャーチスト運動 224 空想的  
社会主義 225 アメリカの労働組合運動 227 フランス、ドイツの労働組合運動 228

第七章 現代經濟への展望

1. 財閥、帝国主義

自由競争から独占資本主義へ 230 カルテルとシンジケート 231 トラスト 232 持株会社と財閥 232 独占形成

の多様性 233 イギリスの大企業と財閥 234 フランスの大企業と財閥 235 アメリカの大企業と財閥 235 ドイ

ツの大企業と財閥 236 日本の財閥 236 経営者革命 237 帝国主義 238

2. 經濟恐慌とその影響

古典的な經濟恐慌 240 經濟恐慌の特徴 241 經濟恐慌の原因 242 一九二九年の世界恐慌 244 ニューデール

政策 245 ナチス經濟 246 人民戦線とブロック經濟 247 \*現代經濟と不況 248

3. 社会主義經濟

ロシア革命 249 戦時共産制とネップ 250 第一次五カ年計画 250 利潤導入 251 中国の国民革命 252 土地革

命戦争 253 文化大革命から四人組追放へ 253 \*毛沢東の新民主主義論 254

参考文献

## 第一章 古代国家と商工業

### 1 石器時代

#### 人類の起源

人類の起源は、研究、発掘が進むにつれて、しだいに遠い過去にさかのぼっていく。一九六七年にケニヤで約五〇〇万年前の人類の化石が発見された。アメリカのパターソンによるものである。一九六四年に、ルイス・リーキーがアフリカのビクトリア湖付近のオルドバイの谷で約二〇〇万年前の原人の化石を発見した。

同じくルイス・リーキーは、約一〇〇万年前のものといわれるジンジャーントロプスの化石を発見した。この頃、これと並んで、アウストラロピテクスも生存したといわれている。

約五〇万年前のものと考えられるピテカントロプス・エレクトス（直立猿人）は、一八九一年ジャワのトリニールでオランダ人デュボワによって発見された。同じ頃のものと考えられるシナントロプス・ペキネンシス（北京原人）の化石は、一九二三年、ズダンスキーによって北京近郊周口店の洞窟で発見された。

ハイデルベルグ人は、約二〇万年前に生存したものだが、この時期が第二間氷期の時代であった。これは、一九

○七年にハイデルベルグ付近で発掘された。

ネアンデルタール人は、約一〇万年前の第三間氷期に生存した。一八五七年、ライン河の支流、ネアンデル谷の洞窟で発見されたのでこの名がついている。ネアンデルタール人は、ヨーロッパから小アジアに分布していることがわかった。この段階になると、頭蓋骨の大きさは、可能なかぎりの大きさにまで発達し、それ以前の人類にくらべて、一段と進歩した生活を送る条件ができた。

### 旧石器時代

石器を打製石器と磨製石器に区別して、打製石器を使用するが磨製石器を知らない段階を旧石器時代と呼ぶ。打製石器も、はじめは原始的なものであったが、しだいに精巧なものに進化し、やがては槍の穂先や弓のやじり(鏃)を作りだした。

ネアンデルタール人までを前期旧石器の時代といい、その時代の人類を旧人類という。それ以後を後期旧石器の時代という。旧石器時代の中で、少しづつ磨製石器がみられるようになるので、これを中石器時代という。これが約一万年前であり、旧石器時代から新石器時代への過渡期である。

旧石器時代から新石器時代への移行は、はじめにオリエントでみられる。ヨーロッパでは、紀元前七〇〇〇年から紀元前三〇〇〇年が中石器の時代で、それから新石器時代へと移行した。この時代の文化の伝播はきわめて遅いから、ある地域に新石器の文明がおこっても、他の地域では、長い間旧石器のままに留まっていた。そのため、広い地域を同じ年代で区切って、旧石器時代と新石器時代に分類することは不可能である。

## 狩猟採集経済

旧石器時代の経済生活は、狩猟と採集にもとづくものであった。採集についていえば、天然にできている植物をとってくるのであるから、発達の段階はあまりかわらない。

しかし、狩猟と漁労については、人間の知恵の発達段階で相当のへだたりがみられる。低い段階では、簡単に捕えることのできる、動きの少ない動物や魚貝類を食べていた。しかし、ネアンデルタール人になると、多くの種類の石器を使い、大形の動物の狩猟を集団で行った。

ネアンデルタール人が絶滅するのと並行して、後氷期時代に入り約五万年前から現生人類すなわちクロマニオン人、グリマルディ人が出現した。グリマルディ人は黒人系である。この段階になると、狩猟の対象は中形動物に移った。中形動物は足が早いので、捕えるときには高度の技術を必要とするが、その肉はうまい。

狩猟のために弓矢と、槍が作られ、漁労のためには、骨角器が作られた。多くの種類の細石器が作られて、狩猟採集経済の中ではもっとも高い水準に進んだことを示している。火を使うことは北京原人が知っていた。しかし、ハイデルベルグ人は火を使っていない。そのあと、ネアンデルタール人が火を使い、それ以後火の使用は続けられている。

文化的発達について見ると、まず、ネアンデルタール人は死者を埋葬する習慣をもっていた。クロマニオン人、グリマルディ人の段階に入ると、副葬品として装飾品、道具、偶像などを残すようになった。それだけ文化的水準が高くなったことを意味するが、洞窟の壁画にみられるような芸術作品も残した。フランスのラスコー、スペインのアルタミラの洞窟が有名である。

## 新石器時代と農耕、牧畜

新石器時代に入ると、磨製石器として石斧が大量に作られた。これは武器にもなるが、木を切り倒す道具になった。その木で簡単な農具を作った。石器は、農具にもなったわけである。

この時代、狩猟、採集から発展して、農耕、牧畜が行われた。石器も農具として使われたときがあるが、使い安さという点からいえば、木器の方が適当であり、石器は、それを作するための工具として重要であった。簡単な木製の農具で土を掘りかえし、そこに種をまいた。

オリエントからヨーロッパにかけては、小麦その他の雑穀が作られた。東南アジアでは、米の水田耕作が広がった。この段階の農業はきわめて原始的なもので、土を深く掘りかえずこともできず、肥料をほどこすこともしなかったから、土地の性質や天候など、自然条件に大きく左右された。

ナイル河の下流のように、毎年上流から栄養分を含んだ砂が押し流されてくるところでは、水の引くのをまつて、そこに小麦の種をまけばよい。しかし、多くの場所では、一度作物をとるとその土地はやせてしまうので、耕地をすてて次の場所に移る休閑法を採用した。

ただ、原始的な農業とはいえ、以前の採集にくらべれば、これは一段と進歩したことを意味する。人間がはじめて計画的に食糧を生産するようになり、食物をもとめて放浪をつづけることがなくなった。もちろん、まだ生産力は低いので、一年分の食糧を完全に生産することはできない。そのため、農業と並行して採集を行い、農産物の不足を補わなければならなかった。

同じように、狩猟を補うものとして牧畜が発生した。牛、豚、羊、山羊など、もっとも利用価値の高い中型動物を、計画的に飼育した。以前は、ただ狩猟で手に入れていただけである。しかし、狩猟だけでは、もし獲物を取りつくしたばあいには、獲物をもとめて遠くへ移住しなければならぬ。牧畜が発達すると、移住の必要がなくなっ

た。

こうして、農耕牧畜の発達は、人間に定住生活を可能ならしめた。ただし、農耕牧畜の発達が、狩猟、採集、漁労を完全に消滅させたというのではなくて、これらも、長い間補助的な手段として行われた。

#### 原始共同体

人間が定住生活を始めたときの最初の社会組織を、原始共同体と呼んでいる。別名、原始共産制、あるいは氏族共同体とも呼ばれている。この時代、人間は数十人単位でまとまって生活していた。一つの単位は、血縁で固められた大家族であり、現在のような一夫一婦制にもとづく小家族が、独立して生活できる条件はなかった。

まだ農業の生産性が低く、一年間働いて収穫した穀物だけでは、生きていくことがむずかしい。土地は広々としているが、道具が木や石であるから、これを十分に耕すことができない。この時代、いくら広くても、土地だけをもっていることは意味がなく、耕すことのできた土地だけが役に立った。しかも、この土地を集団労働で耕し、足りない部分を狩猟、漁労、採集で補い、皆で手わけして、お互いに助け合わなければ生きていくことができない。

そのような状態であるから、土地は大家族の共有となり、私有財産は発生しない。誰かが人よりも多くのものをとると、それだけ、誰かの食物を奪い、死に追いやる可能性があるからだ。こういう生活条件の中では、人間には利己主義が芽ばえず、自分の割当てられるべきものを食べて、満足するという習性を身につけてしまう。指導者としての酋長（部族長）がいても、酋長が、その他の人間よりもめぐまれた生活をしていたというわけではない。男女の差別もなかった。

ただ、仕事の性質と適性から、食物の調理は女性が担当し、狩猟、漁労は男性の役割となった。農業のときは、すべての人間がそれぞれ手わけをして働いた。原始的な共産主義であるが、こうした制度が必要であったのは、当



時の生産力が極度に低く、集団で死に絶えないように懸命に働き、共同で助けあっていかなければならない条件のもとにおかれていたからであった。

こうした平等主義を可能にさせたのは、それが血縁の中での平等主義だったためである。他人との関係では、このようなわけにはいかない。あくまで、原始共同体の平等主義は、共同体内部での平等主義であって、他の共同体との関係では、むしろきびしい不平等の関係にあった。なぜなら、それぞれの共同体が定住している場所の条件がちがひ、有利、不利があったからである。

土地の生産性の高いところに陣どつた共同体は有利であった。また、海岸のそばに生活する共同体は、農作物を補うための漁労ができるから豊かである。しかし、山間部に定住して、その土地がやせているばあいは不利である。そこで、絶えず縄張り争いがおきる。原始共同体の時代は決して牧歌的時代ではなく、共同体と共同体との闘争がたえまなく続けられている時代でもあった。

#### 交換のはじまり

この時代は、原則として共同体の中で作ったものを共同体の中で消費する完全な自給自足経済であった。しかし、それでは交換がまったくなかつたといえは、そうではなくて、すでにその芽ばえがあらわれていた。新石器時代の特徴の一つは、土器が作られ、これが水を入れたり食物を調理するのに使われたことである。土器の製作技術が進歩して、高度の土器が作られるようになれば、こうしたものをすべての共同体が同じように製作することはなくなる。そのうえ、土器を作るための土があらゆるところに分布しているわけでもない。

そうであるのに、特定の種類の土器が、広い地域から発掘される。このことは、すでに土器を専門的に作る共同体があり、そこにすでに専門の職人が発生していたことを物語る。また、その土器が、共同体と共同体との交換を